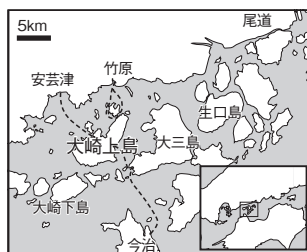


④ 大崎上島おおさかみじま（広島県大崎上島町）——大崎海星高等学校

高校存続に向け、町と高校の連携による魅力化を

大崎上島町総務企画課 主任 越智 悠子



大崎上島：瀬戸内海中央に位置する芸予諸島の島。面積38.34km²、周囲60.9km。大崎上島町は平成15年に島内3自治体が合併してできた。人口7,890人（平成28年9月現在）。造船と柑橘栽培で知られ、「教育の島」としても特色を打ち出している。

● 造船とみかんの島が直面する課題

大崎上島町は、瀬戸内海の芸予諸島の中にある大崎上島を中心とした複数の島々からなる全域離島の町です。瀬戸内海特有の温暖な気候に恵まれ、造船と柑橘栽培が盛んな町として発展しました。しかし、現在は人口八〇〇〇人弱、高齢化率は五〇パーセント弱と、過疎化・高齢化が進行しており、人口減少に歯止めをかけ、町を活性化していくことが大きな課題となっています。

● 岐路に立たされた島唯一の高校

広島県教育委員会（以下、県教委）が平成二六年二月に策定した「今後の県立学校の在り方に係る基本計画」は、次

のような内容となっています。

一学年一学級規模の学校は、各学校が学校関係者、所在する市町及び市町教育委員会などで構成する「学校活性化地域協議会」（以下、協議会）を設置し、協議会において教育活動や部活動などで他校に見られない取り組みの強化などによる活性化策を検討すること。

その検討結果を踏まえ、各学校において三年間（二八年度末まで）、市町と連携しながら活性化策を実施し、全校生徒数が八〇人以上となることを目指すこと。

活性化策実施後の平成二九、三〇年度の二年連続で、全校生徒数が八〇人未満となった学校は、協議会の意見を聴いた上で、地理的条件を考慮し、次のいずれかの措置が取られること。



平成26年に校舎が新しくなった大崎海星高校。
建物内部は木目調の開放的な空間が広がる。

- ① 近隣県立高等学校のキャンパス校へ改組
- ② 特定の中学校と緊密な連携による一体的な学校運営を行う「中高等学校構想」への移行
- ③ 統廃合（市町立学校としての存続を含む）

町内唯一の高等学校である広島県立大崎海星高等学校（以下、大崎海星高校）は、全校生徒六九名の小規模校です。過疎化による若年層の減少から、近年は生徒数の減少が進み、平成二四年度以降全校生徒が八〇人を超えない状況が続いています。県の措置検討校の対象校となったことから、同二六年に協議会を設置、活性化に向けた方策などに関して定期的に議論を重ねながら、学校の魅力を高めるためのさまざまな取り組みを始めました。

全域離島である本町にとって、高等学校があるということは、その年齢の子どもを持つ保護者（『生産年齢人口』の流出を抑制する意味においても、移住定住を促進する点においても重要なことです。仮に高等学校が町からなくなることになってしまえば、生産年齢人口の多くが流出する可能性があり、それによる町への影響は計り知れません。そこで、町として大崎海星高校の存続に向け、同校と連携してさまざまな活性化策を実施することとしました。平成二七年度から公営塾「神峰学舎」^{かんのなみ}を設置したほか、同校が実施する生徒の全国募集や「大崎上島学」カリキュラム開発などの活性化策に対する支援を行っています。

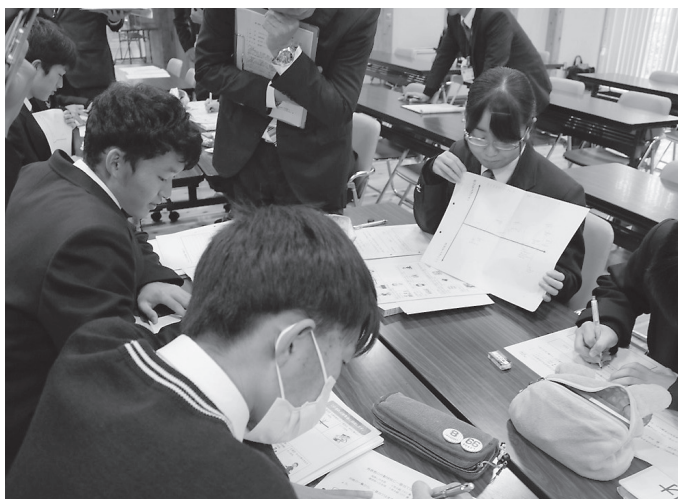
平成二七年度末に大崎海星高校において「大崎海星高校魅力化プロジェクト」推進計画を策定し、今年度からこの計画に基づく取り組みを進めているところです。また、町では、同二七年一〇月に策定した「大崎上島町まち・ひと・

しごと総合戦略」において、大崎海星高校に対する支援を、地方創生の取り組みとして位置づけており、それにもとづき施策を展開しているところです。

●島外からの生徒を見守る「島親」

町内の中学校を卒業する生徒の数は、近年四〇～五〇人程度で推移していましたが、昨年度は三九人と減少しました。今後は四〇人前後で推移し、それ以上増えることはほぼないと見込まれます。本町は離島とはいえ、本土への交通アクセスが悪くないことから、町外の高校へ進学する生徒も多く、町内の中学校から大崎海星高校への進学率は四〇パーセントを下回る状況が続いています。子どもの数が減少する中で、町内の中学校からの生徒のみでは、全校生徒八〇人という生徒数の確保が困難であると考えられることから、同校では、平成二八年度入学生より県外からの生徒を受け入れることとし、生徒の全国募集を開始しました。

県外の生徒を受け入れるにあたっては、大崎海星高校には寮がないため、生徒の居所の確保が課題となりました。生徒が町内に居住することは、人口の増加、地域の活性化につながります。そこで、町が宿舍を用意することとし、中国電力の協力により、大崎発電所の職員寮の一部を町が借上げ、生徒に貸付できるようにしました。貸付にかかる生徒の負担は、部屋代、食事代（朝夕のみ）、光熱水費を含



大崎上島学に取り組む生徒たち。学年ごとにテーマを設定し、体験活動などを通じて地域の良さや強みを学ぶ。

め月三万円で、実際の支出額との差額についてはすべて町が負担しています。また、保護者の代わりとなる「島親」が対象生徒一人ひとりに配置されており、親元から離れた生活に対する支援を行っています。

今年度は県外からの応募はありませんでしたが、広島市



公営塾「神峰学舎」は大崎海星高校と同じ建物内にある。地域おこし協力隊として公営塾で指導を行う佐々木雄大（たけひろ）講師と永嶋樹里（きさと）講師。

など県内であっても自宅からの通学は不可能な地域からの生徒が二名入学し、寮に入居しています。今後、宿泊を希望する生徒の数が町が借り受けてできる寮の室数を超えた場合、どのように対応するのか、検討を重ねていく必要があります。

●公営塾で高校の魅力化を推進

本町では、前述のとおり大崎海星高校の活性化策の一つとして、同校生徒を対象とした公営塾「神峰学舎」を設置し運営しています。

公営塾では、生徒たちの多様な進路実現の支援を目指し、教科学習のほか、キャリア教育も行っています。そのため、講師には教科指導に特化した人を選定するのではなく、さまざまな経験を積んだ者で、かつ「高校の活性化は地域の活性化」という考えに同調し、高い志を持った人を任用したいため、「地域おこし協力隊」の制度を活用することとしました。全国に募集をかけていますが、適任者を必要人数確保できるのか、途中で辞めた場合の補充をどうするかといったリスクを負っています。

実際、昨年度は三名募集したにもかかわらず、二名しか適任者が見つからなかったため、地元の元教員や私塾講師を非常勤で任用することにより運営していました。今年度は必要見込み人数である三名を当初は確保できていたものの、途中で一名退職したため、現在は地域おこし協力隊員二名と非常勤で任用した講師二名で運営している状況です。講師不足は、塾の運営において最も大きな問題であり、安定確保が課題となっています。

大崎海星高校の生徒が希望する進路は、四年制大学進学から就職までとさまざまです。幅広い進路希望に対応するため、公営塾では生徒一人ひとりの進路・学力に合わせた個別カリキュラムを作成しています。講義形式ではなく、そのカリキュラムに基づき生徒が自分自身で主体的に学習する「自律学習」による指導が特徴です。

●長期的な視点で魅力化を

本町は大崎海星高校が「県立」ということもあり、町内に所在するにも関わらずこれまで深く関わることはありませんでした。町にあるのが当たり前であり、その存在意義を考えることすらなかったと思います。町において、大崎海星高校の存在の重要性和支援の必要性が認識され、議論されるようになったのは、県教委が小規模校のあり方の検討を開始してから少し後のことで、本気で施策を打たなければならぬと動き始めたのは、県教委の「今後の県立学校の在り方に係る基本計画」がきっかけだと思います。

この事業に関わり始めた当初は、県立高校について、町が何をどうすれば良いのかまったくわからない中で、闇雲に走り始めました。今も方向性を模索しながら走っているところですが、「町のために高校は必要である。町が本気で動かなければ高校がなくなってしまう」という思いはしっかりと抱き続けています。

県教委の意図は、これからの二カ年度を乗り切れば良いというものではありません。平成三十一年度以降も安定して八〇人以上の生徒数を確保していこうと考えたと、町内生徒の進学率を上げることはもちろん、町外・県外からの生徒を呼び込む必要があります。

平成二八年度の入学者数は、数年ぶりに三〇人を超え、

前年度と比べ大幅に増加しています。また、町内の中学校からの大崎海星高校への進学率についても、大幅に増加しました。全校生徒八〇人を超えるという目的達成に向けて、初年度としては良好な結果であるといえます。

「県立だから」「町だから」という妙な縄張り意識を抱いていると何も生まれず、お互いが衰退の一途をたどるだけです。生徒数などが増加に転じたのは、高校と町との連携体制が構築されたからだと感じています。

大崎海星高校の存続、同校および町の活性化のため、町は今後も同校と連携し、大崎海星高校の魅力をさらに高めていきたいと考えています。

表 大崎海星高校の入学者数、全生徒数、町内中学校からの進学率の推移

	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度
入学者数(うち町外)	25人(3人)	18人(5人)	20人(1人)	31人(7人)
全校生徒数	74人	67人	63人	69人
町内中学校からの進学率	37.9%	30.2%	36.5%	61.5%

◆島側からみた高校魅力化◆

それは突然だった。事実を飲み込めなかった私は、目に飛び込んだ文章を何度も読み返した。島内で中学生向けの私塾を運営する私は、仕事終わりに普段見ることのない大崎海星高校のホームページを何気なく見ていた時に、島唯一の高校が置かれている現実を知った。高校に統廃合が突きつけられていたのだ。あれから2年、大崎上島町が県立高校を全面的にサポートするかたちで、大崎海星高校魅力化プロジェクトが進んでいる。

高校に統廃合の危機が迫っていることを知った夜は、眠ることができなかったことを今でも昨日のこのように覚えている。その後、同校の校長先生と会うことがあった。仕事が終わった22時半ごろ、職場に校長先生と教頭先生が来られた。「高校を残すためにできることはすべてやる」と、校長先生らの熱い想いに触れ、私自身も同じ気持ちになった。そして、高校と地域を繋ぐパイプ役として高校に関わり始めた。高校に出入りするなかで、校長先生だけではなく現場にも本気の先生がいることを知った。

プロジェクトが本格的にスタートして2年目を迎える今年度から、私は「魅力化推進コーディネーター」として、正式に携わることとなった。地域を想

う人が多いこの島は、高校を想う人も多い。プロジェクトが動き始めると、高校のためならなんでもすると動いてくれる本気の地域の大人たちが現れた。しかし、文化の違う組織や立場の異なる人が同じプロジェクトを進めることは、想像以上に難しい。このような状況において、関係組織や人を繋げる「潤滑油」となり、プロジェクトを一步でも進めることがコーディネーターである私の役割である。

今後は、まず統廃合の基準に設定されている生徒数確保に注力する。それと並行して、プロジェクトの持続可能な体制を確立したい。それは、目指すビジョンの作成と共有、人材確保と育成、成果を出し続けることの3点である。町は「教育の島」に大きく舵を切った。コーディネーターとしては、高校が主体となり、島内にある他の学校との学校間連携をしながら、大崎上島でしかできない、大崎上島だからこそできる教育を追求したい。本気の町長、本気の先生、本気の地域の人たち、そして、島外から来てくれた本気の地域おこし協力隊員。これだけ熱い想いを持った人が集まってプロジェクトが進まないわけがない。メンバーたちの想いを繋げて、島の子どもたちが通いたい、通ってよかったと胸を張れる魅力ある高校を目指したい。

(大崎海星高校魅力化推進コーディネーター／(株)しまのみらい代表取締役 取釜宏行)

越智悠子（おち ゆうこ）

大崎上島町（旧東野町）出身。広島大学学校教育学部卒。賀茂広域行政組合採用、東広島市役所勤務後、平成13年度末退職。同14年度東野町役場（現大崎上島町役場）採用。同27年度より大崎海星高校魅力化推進事業担当。